

箕 島 遺 跡

—長崎県下県郡美津島町所在—



1993

美津島町教育委員会

美津島町文化財調査報告書 第6集

箕 島 遺 跡

——長崎県下県郡美津島町所在——

1993

美津島町教育委員会

発刊にあたって

壱岐・対馬国定公園の中心的景勝地浅茅湾は、豊かで美しい自然と天然の良港、大陸文化の中継地として、本町の歴史と文化を育んできました。

この浅茅湾沿岸の岬や島々には、弥生～古墳時代、中世にかけての墳墓群が存在することが、早くから知られていました。

今回は、平成3年度と4年度の2か年にわたり、濃部浅茅湾に南北に浮ぶ箕島に群集する墳墓群の規模、内容等を調査し、これら墳墓群の詳細な資料を得る目的で発掘調査を行いました。

この調査が、町内に数多く散在する文化遺産を有機的に結び付ける一端になることを期待するものであります。

調査にあたっては、大変多忙な中、また、条件的に非常に困難の多い中、県文化課の副島和明主任文化財保護主事、村川逸朗文化財保護主事、本田秀樹文化財保護主事、また、地元関係者の皆様に多大なご指導とご協力をいただき、ここに報告の運びとなりましたことに感謝申し上げます。

この報告書が、文化財愛護精神の高揚と学術研究の資料としての一助になれば幸いに存じます。

平成5年3月31日

美津島町教育委員会

教育長 川 本 初 實

例　　言

1. 本書は長崎県下県郡美津島町大字大山に所在する箕島遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査主体は美津島町教育委員会で、調査は美津島町教育委員会と長崎県教育庁文化課が担当した。
3. 調査は2ヶ年にわたって実施され、平成3年8月19日～同年8月28日と平成4年6月1日～同年6月12日の20日間行った。
4. 調査関係者は次の通りである。

美津島町教育委員会	教　育　長	川　本　初　實
(調査担当)	生涯学習係長	内　田　洋
(　々　)	主　　査	福　井　順　一
	主　　査	大　浦　日奈子
長崎県教育庁文化課		
(調査担当)	主任文化財保護主事	副　島　和　明
(　々　)	文化財保護主事	村　川　逸　朗
(　々　)	文化財保護主事	本　田　秀　樹
土地所有者	大　山　区	
発掘協力者	桐谷　毅、桐谷サツ子、神宮多鶴子、大塔　鉄男、小田　嘉之、 吉野　ウメ、吉野百合子、阿比留和子	
整理協力者	渡辺　洋子、石本　充子、森　　洋子、河村　由紀、斎藤いづみ、 松尾　昭子	

5. 本書は分担執筆し、各項の執筆者は本文目次に記した。
6. 出土した貝類については山本愛三先生（日本貝類学会員）から玉稿を頂戴した。
7. 本書の編集は本田による。

本文目次

I 調査に至る経緯	1	(副島 和明)
II 遺跡の地理的・歴史的環境	2	(本田 秀樹)
III 調 査	8	
1 調査の概要	8	(副島 和明)
2 遺 構	12	
(1) 第0号・第1号遺構	12	
1) 遺 構	12	(村川 逸朗)
2) 出土遺物	14	(本田 秀樹)
(2) 第2号遺構	19	
1) 遺 構	19	(本田 秀樹)
2) 出土遺物	20	(　　タ　　)
(3) 第31号・第41号遺構	21	
1) 遺 構	21	(本田 秀樹)
2) 出土遺物	22	(　　タ　　)
(4) 第36号遺構	27	
1) 遺 構	27	(副島 和明)
2) 出土遺物	28	(本田 秀樹)
IV 小 結	30	(本田 秀樹)
V 長崎県対馬箕島36号墳墓内より出土した貝類	50	(山本 愛三)

挿 図 目 次

第1図 箕島遺跡位置図①	1
第2図 箕島遺跡位置図② (S = 1 / 10,000)	3
第3図 周辺の遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)	5
第4図 箕島遺跡南側造構配置図 (S = 1 / 500)	9 · 10
第5図 箕島遺跡北側造構配置図 (S = 1 / 500)	11
第6図 第0号(右) · 第1号遺構(左)実測図 (S = 1 / 40)	12
第7図 第0号遺構実測図 (S = 1 / 30)	13
第8図 第0号 · 第1号遺構出土遺物 (S = 1 / 3)	15
第9図 第2号遺構実測図 (S = 1 / 40)	17 · 18
第10図 第2号遺構出土遺物① (S = 1 / 3)	20
第11図 第2号遺構出土遺物② (S = 1 / 1)	21
第12図 第31号(下) · 第41号遺構(上)実測図 (S = 1 / 40)	23
第13図 第31号 · 第41号遺構出土遺物① (S = 1 / 3)	25
第14図 第31号遺構出土遺物② (S = 1 / 3)	26
第15図 第36号遺構実測図 (S = 1 / 40)	27
第16図 第36号遺構出土遺物① (S = 1 / 2)	28
第17図 第36号遺構出土遺物② (S = 2 / 3)	29

表 目 次

表1 遺跡地名表①	6
表2 遺跡地名表②	7

図版目次

図版1	箕島遺跡遠景（鳥帽子岳より）	34
図版2	第0号（右）・第1号（左）遺構検出状況（南から）	35
	第0号（手前）・第1号（奥）遺構 積石除去後の状況（東から）	35
図版3	第1号遺構 遺物出土状況（南から、西から）	36
図版4	第2号遺構 検出状況（東から）	37
	第2号遺構 検出状況（南から）	37
図版5	第2号遺構 積石除去後の状況（東から）	38
	第2号遺構 遺物出土状況（東から）	38
図版6	第31号（手前）・第41号（奥）遺構（東から）	39
	第31号（手前）・第41号（奥）遺構 調査後の状況（東から）	39
図版7	第36号遺構検出状況（北から）	40
	第36号遺構、調査後の状況（北から）	40
図版8	第9号遺構、第9号・第10号遺構、第10号遺構	41
	第11号、第13号遺構、第17号遺構	41
図版9	第22号遺構、第24号遺構、第25号遺構	42
	第26号・第29号遺構、第28号遺構、第38号遺構	42
図版10	その他の集石遺構	43
図版11	調査風景①、調査風景②	44
図版12	第0号・第1号遺構 出土遺物（S=1/3）	45
図版13	第31号 出土遺物（S=1/3）	46
図版14	第2号遺構 出土遺物 玉類（S=1/1）その他（S=1/3）	47
	第41号遺構 出土遺物（S=1/3）	47
	第36号遺構 出土遺物（S=1/2）	47

I 調査に至る経緯

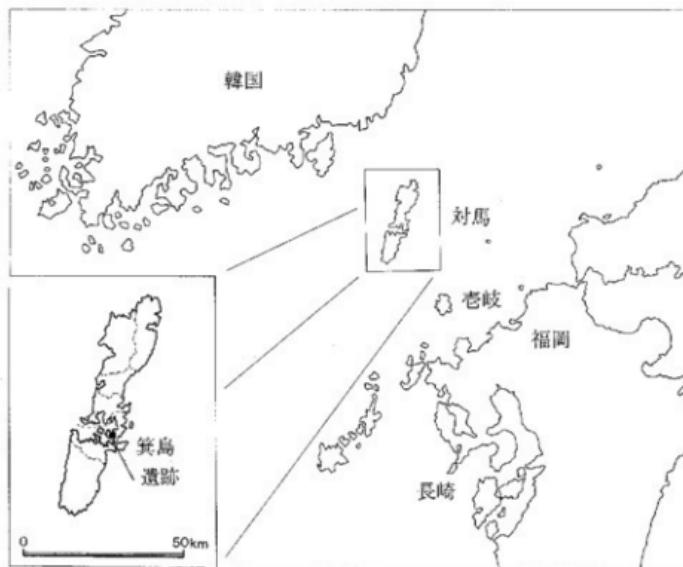
浅茅湾沿岸の岬および島々には、弥生～古墳時代、中世、近世にかけての墳墓群が数多く存在することは、浅茅湾を中心とする過去の発掘調査で知られていた。

昭和60年に実施した「遺跡周知事業」の美津島町内分布調査の際に、かがり松鼻遺跡で半壊した箱式石棺墓の下部に青銅器が発見され、昭和62年に遺跡が立地する部分の自然崩壊が進行したために、記録保存を図る目的で緊急発掘調査を町教育委員会が実施した。その結果、弥生時代の変形細形銅劍、把頭飾等の副葬品が検出された。

この調査を契機に町教育委員会は、浅茅湾内の詳細分布調査を行い、遺跡の規模、内容、性格、時期等の詳細な資料を得るために、年次的に調査を実施することになった。

平成3年度に、濃部浅茅湾内の箕島に存在する箕島遺跡の調査を実施し、平成4年度も箕島遺跡の調査を継続して実施した。

その結果、古墳時代～中世、近世に至る多数の墳墓群を確認し、その内の積石塚2基、箱式石棺墓2基、配石石蓋土壙墓1基の発掘調査を実施した。



第1図 箕島遺跡 位置図①

II 遺跡の地理的・歴史的環境

〔魏志倭人伝〕

「所居絶島 方可四百餘里 土地山險多深林 道路如禽鹿徑 有千餘戸 無良田 食海物自活乘船南北市繩」

「住んでいるところは四面を海でかこまれた孤島で、広さは方四百余里ばかりである。土地は山が險しく、深林が多く、道路は禽鹿の通う小径のようで、狭くて艱しい。人家は千余戸ある。良田がなく、人々は海産物を食糧として自活しているが、船によって南北から米穀を買入れてもいる。」(註1)

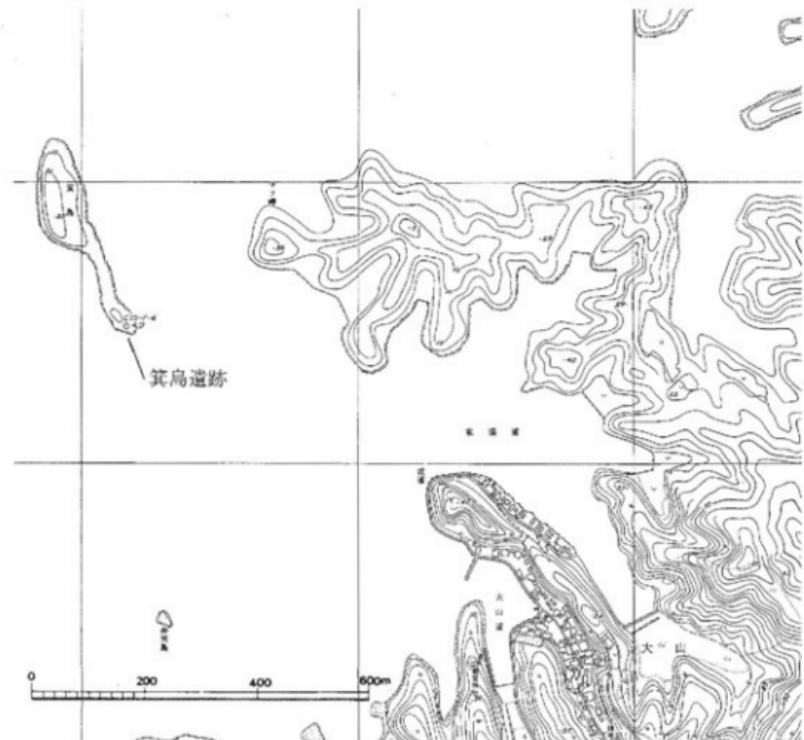
対馬の紹介でよく引き合いに出されるこの「魏志倭人伝」の記述は、時代の差こそあれはすれ対馬の自然環境・人々の生活習慣を簡潔な言葉で如実に表している。

現在の対馬にあっても地理的環境は基本的には変わりがない。南の壱岐島まで約50km、九州本土までは約80km、かつての「奴国」福岡までは約110数kmの距離にある。対馬の北端から朝鮮半島まで直線距離で約53kmであることを思うと、対馬は「絶島」であると同時に「国境の島」でもある。このような地理的条件は古くから大陸文化の窓口としてのみならず、緊迫する対外情勢の下では前線基地としての役割も負わされてきた。対馬島は南北に細長い島で、南北約82km・東西約18km・総面積は約710km²を有し、日本で3番目に大きい島である。しかしながら平地に乏しく、全島の87%が山林におおわれている。標高200~300mの山々が海岸線まで迫り、耕地率はわずか3.3%で県内の離島のなかで最も低い。南隣の壱岐と比較してみると、島の総面積は対馬の5分の1しかないので耕地面積は対馬の2.1倍で、大幅な違いを見せている。それは対馬の地質にも出来る。島の大部分が新世代第3紀の頁岩と砂岩の互層である対州層群からなり、雨水の浸透や風化にたいして脆い土壌は滯水性に乏しい。肥沃度も低く、本県でも最も地力の弱い地質で耕地には適さない。かつては焼畑農業の一一種も行われていたという。一方、対馬の海岸線は総延長828km。浅い入江と岬の続く東海岸、海食崖が雄大な岩石の西海岸、複雑なリアス式海岸と小島が発達した対馬中央部の浅茅湾沿岸とそれぞれが特徴的な光景を写します。四方を広大な海に囲まれ豊かな水産資源に恵まれた対馬。良田に恵まれない人々が、生活の糧・活路を海に見出したのも当然のことであったろう。

対馬の中央部に位置する美津島町は、北は浅茅湾をはさんで一部が豊玉町、南は厳原町に接する。面積119.83km²、世帯数約2,600、人口約9,100で島の行政的中心地・厳原町に次ぐ町である。町の86.7%は山林で、耕地率は3.33%。数少ない水田の大部分は遠浅で奥深い入江を干拓したものである。耕地には乏しいこの町でも、海岸線は総延長275kmと日本一長い。生産所得や就業人口は水産業がトップで、海と共に生きる典型的な対馬の様相を呈する町である。

美津島町の遺跡総数は113で、対馬全体の3分の1以上の遺跡がこの町に所在する。特徴的なのは旧石器時代の遺跡の発見ではなく縄文時代も少ないが、弥生・古墳時代にかけては遺跡が圧倒的に増加することである。これは美津島町に限ったものではなく、対馬全島に共通する特徴である。なかでも浅茅湾周辺はかなりの数の遺跡が集中する。各遺跡の概要是長崎県教育委員会が九州大学に調査を依頼して1974年に発行された『対馬』(長崎県文化財調査報告書第17集(註2))に詳しいので、そちらを参照されたい。ここでは町内で近年調査された遺跡を以下紹介していきたい。

かがり松鼻遺跡(58)は1987年に同町の依頼を受けて県文化課が発掘調査を実施した遺跡である(註3)。遺跡は万関橋を臨む久須保浦に突き出た岬の先端に位置する。ここは1985年に県が実施した分布調査の際、崩壊寸前の石棺内部から青銅器が露出していることが判明し、緊急の調査が行われた。その結果、石棺1基を検出し、内部から変形細形銅劍・把頭飾・ガラス



第2図 箕島遺跡 位置図② ($S = 1/10,000$)

小玉等が出土した。特に把頭飾は流雲形渦文を有し、中國洛陽を中心とした前漢代に制作されたものであるという。流入経路を考えるうえで注目に値する資料といえる。

出居塚古墳（40）は難知浦の最深部の丘陵先端部、標高約50mに位置する。墳丘はかつてより前方後円墳とみられていたが、1991年に県内古墳詳細分布調査で県文化課が測量を行ったところ県内初の前方後方墳であることが判明した（註4）。主軸を北北東～南南西にとり、墳丘規模は全長40mを測る。内部主体は1954年の九学会の報告（註5）では組合せ箱式石棺とあるが、現状では竪穴式石室と考えられている。築造時期は九学会の調査の際に出土した有茎柳葉式の銅鏡から判断して、古墳時代前期の4世紀後半から5世紀初頭にかけての築造と推定される。付近には3基の前方後円墳を有する根曾古墳群（44～49）もあり、対馬では数少ない墳丘を持つ古墳の一つとして畿内系勢力のあり方を知るうえでも貴重な遺跡である。

この他、中世の遺跡として塚塔崎遺跡（7）がある（註6）。遺跡は浅茅湾の面した深浦の岬の先端に位置し、階段状に削平された墓域に34基の中世墳墓と1基の弥生～古墳期の箱式石棺が発見されていた。積石を用いた墳墓群ということで、本報告の箕島遺跡（6）との関連性も考えられる。

（註1） 現代語訳は三品彰英編著『那馬台国研究総覧』 刊元社 1978 から引用した

（註2） 岡崎敬・小田富士雄他『対馬・浅茅湾とその周辺の考古学調査』 長崎県文化財調査報告書第17号 長崎県教育委員会 1974

（註3） 高野晋司編『かがり松鼻遺跡』 美津島町文化財調査報告書第3集 美津島町教育委員会 1988

（註4） 藤田和裕編『県内古墳詳細分布調査報告書』 長崎県文化財調査報告書第106集長崎県教育委員会 1992

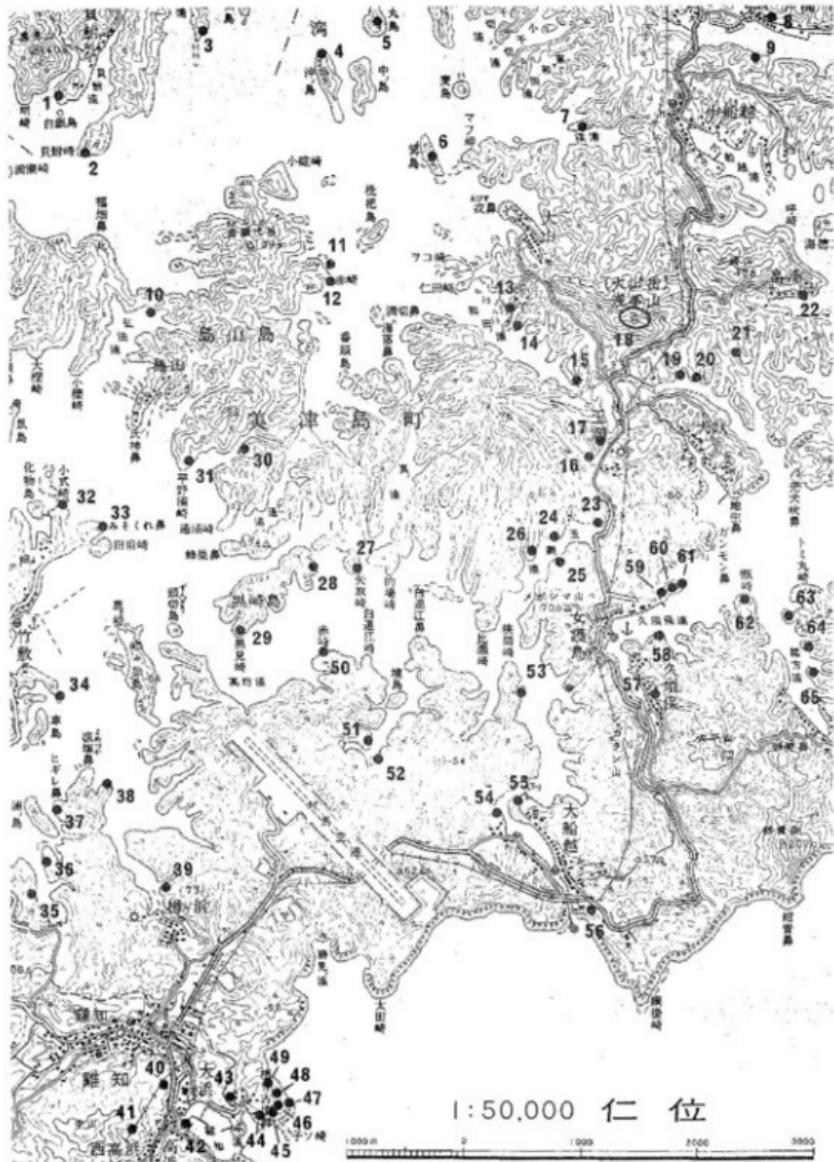
（註5） 駒井和愛他『考古学から観た対馬』『対馬の自然と文化』 九学会連合対馬共同調査委員会 1954

（註6） 塚塔崎遺跡発掘調査団編『塚塔崎遺跡一対馬美津島町小船越所在の中世墳墓』 長崎県下県都美津島町教育委員会 1977

（参考文献）

対馬文序『つしま百科』 1977

美津島町役場『美津島町誌』 1978



第3図 周辺の遺跡分布図 ($S = 1/50,000$)

番号	遺跡名	所 在 地	種 別	立 地	時 代	備 考
1	白銀崎遺跡	豊玉町貞朝字貝崎	墓 墓	御 中	古	
2	貝崎崎古墳	〃 〃 字貝崎崎	古 墓	〃 古 墓		
3	飯瀬遺跡	〃 蟹崎字長崎	項 墓	〃 阿 生		
4	沖ノ島遺跡	美津島町大山字千切ノ内	墳 墓	島 例・古		
5	丸島遺跡	〃 〃 字丸島	積石塚	〃 〃		
6	箕島遺跡	〃 〃 字箕島	墳 墓	〃 労～中		
7	冢塔崎遺跡	〃 〃 字内浦出	〃	原 中	世	
8	芦ヶ浦遺跡	〃 芦浦字在所	〃	丘 墓	齊・古	
9	おおぼら櫛穴	〃 亂原字寺越	遺物包含地	山 墓	弥 生	
10	弘法瀬遺跡	島山字弘法瀬	墳 墓	岬 弥・古		
11	赤崎北遺跡	〃 〃 字赤崎	〃	〃 中	世	
12	赤崎遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 古 墓		
13	和田ノ浦第3遺跡	〃 大山字和田ノ浦	〃	台 地	勞～中	
14	〃 第2遺跡	〃 〃 〃	〃	丘 墓	弥・古	箱式石棺3～4基
15	〃 第1遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 〃		箱式石棺
16	玉瀬ハナデンボ遺跡	〃 〃 字玉瀬	〃	台 地	〃	
17	ハナデンボ北遺跡	〃 〃 〃	〃	岬 〃		箱式石棺3～4基
18	大山城跡	〃 〃	城 跡	山 中	世	
19	入道ヶ浦第2遺跡	〃 大穴字入道ヶ浦	墳 墓	岬 弥・古		箱式石棺
20	〃 第3遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 〃		箱式石棺2基
21	中ノ浦遺跡	〃 〃 字中ノ浦	〃	〃 古 墓		
22	高ノ浦遺跡	〃 小船越字高ノ浦	〃	〃 弥・古		箱式石棺2基
23	玉瀬浦遺跡	〃 大山字玉瀬	〃	〃 古 墓		
24	平瀬第2遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 〃		箱式石棺1基
25	〃 第3遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 〃		箱式石棺6～7基
26	〃 第4遺跡	〃 〃 〃	〃	丘 墓	〃	箱式石棺7～8基
27	矢取崎遺跡	〃 島山字狹瀬戸	〃	原 〃		箱式石棺1基、積石塚1基
28	風見崎第1遺跡	〃 〃 字黒見崎	〃	〃 〃		箱式石棺
29	〃 第2遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 〃		箱式石棺
30	平野浦遺跡	〃 〃 字平野	〃	〃 弥・古		
31	平野浦崎遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 〃		箱式石棺
32	小式崎遺跡	〃 竹敷小式崎	〃	〃 〃		箱式石棺
33	みそくれ舟遺跡	〃 〃 字ユリゴシ	〃	〃 〃		箱式石棺1～2基
34	モウコ崎遺跡	〃 〃 字島ノ内	〃	〃 〃		箱式石棺数基
35	久須ノ浦第1遺跡	〃 道知字久須ノ浦	〃	〃 古 墓		箱式石棺1基
36	〃 第2遺跡	〃 〃 〃	〃	〃 〃		箱式石棺数基
37	ヒギレ鼻遺跡	〃 〃 字カシズ	〃	〃 弥・古		箱式石棺1基
38	一本松遺跡	〃 〃 字口千津ノ演	〃	丘 墓	〃	箱式石棺数基
39	椿ヶ浜遺跡	〃 〃 字陽侍ノ浜	〃	岬 〃		箱式石棺1基
40	山原塚古墳	〃 〃 字濱田證陰	古 墓	丘 墓	古 墓	前方後方墳（鶴の山古墳）
41	サイノヤマ古墳	〃 〃 字濱ノ原陽	〃	台 地	〃	横穴式石室
42	高浜ヒタ遺跡	〃 〃 字濱田原下ヒタ	遺物包含地	平 地	〃	
43	根曾西遺跡	〃 〃 字理知下ヒタ	墳 墓	台 地	〃	

表1 遺跡地名表 ①

番号	遺跡名	所 在 地	種 別	立 地	時 代	備 考
4-4	根曾4号墳	美津島町難知字子ソ三番	古 墓	丘 陵	古 墓	44, 45, 47~49国指定 根曾古墳群
4-5	根曾5号墳	# # #	#	#	#	
4-6	根曾6号墳	# # #	#	#	#	
4-7	根曾2号墳	# # #	#	#	#	
4-8	根曾3号墳	# # #	#	#	#	
4-9	根曾1号墳	# # #	#	#	#	
5-0	白連江赤崎遺跡	# 高坊	遺 處	岬	弥・古	
5-1	白連江第1遺跡	# 竹數字シレエ	#	#	尾一古	箱式石棺6基
5-2	白連江油西遺跡	# # #	#	#	弥・古	箱式石棺3~4基
5-3	狹間崎南遺跡	# 狹間崎	#	#	#	
5-4	牟越対岸遺跡	# 大船越	#	#	#	
5-5	葉坂南遺跡	# # 字古里	#	#	#	
5-6	大船越遺跡	# # 字下在所	遺物包含地	平 地	異 文	
5-7	久須保遺跡	# 久須保	墳 墓	岬	弥・古	箱式石棺2~3基
5-8	かがり松鼻遺跡	# # 字藏ノ本	#	#	#	
5-9	池ノ瀬鼻2号墳	# # 字池ノ瀬	古 墓	#	古 墓	
6-0	# 1号墳	# # #	#	#	#	
6-1	池ノ瀬鼻遺跡	# # #	墳 墓	#	弥・古	
6-2	臨岐遺跡	# 緒力字ウゼ	#	#	#	
6-3	緒方浦第3遺跡	# # 字新八	#	#	#	
6-4	# 第2遺跡	# # 字瀬ノ内	#	#	#	
6-5	# 第1遺跡	# # #	#	#	#	

表2 遺跡地名表(2)

III 調査

1 調査の概要

調査は、島内の詳細な分布調査を実施し、遺構の確認を主とし、積石塚1基と箱式石棺墓1基の計2基の発掘調査を実施して、遺構の形成時期及び性格等を把握することを目的として計画した。

箕島は、ほぼ南北に長さ400m×幅約30m（南側）、幅約90m（北側）と細長く横たわっており、島の南側での遺構集中箇所を南半部、北側の遺構集中箇所を北半部として記載した。

平成3年8月19日～8月28日の調査で、まず島の南半部の南端部分から調査を実施し、順次北側へ作業を進めることにした。

島の南半部に集中して、箱式石棺墓及び積石塚の墳墓群が39基発見された。東側斜面（標高約3.5m～6m）に第12号遺構～第41号遺構の30基が確認され、標高8mの平坦な頂上部分に箱式石棺が1基（第1号遺構）露出し、その東側と南側に砂岩の板状石を格円形状に積んだ2基の積石塚（報告書掲載遺構）が、北側に第3号遺構～第11号遺構も確認された。

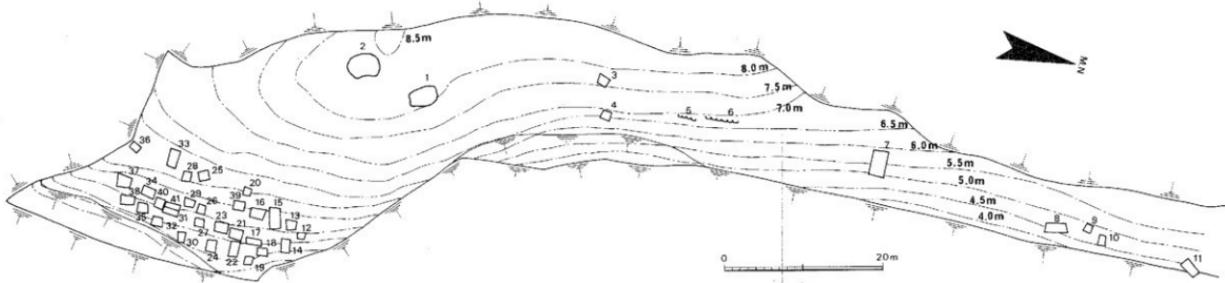
北半部では、標高15m～23m程の西から北側への傾斜面に第42号遺構～第67号遺構の25基を確認した。

平成3年度調査は、墳墓64基の確認と、第0号遺構及び第1号遺構の発掘調査を実施し、次年度に継続調査を実施して北半部の積石塚の確認を行うことにした。

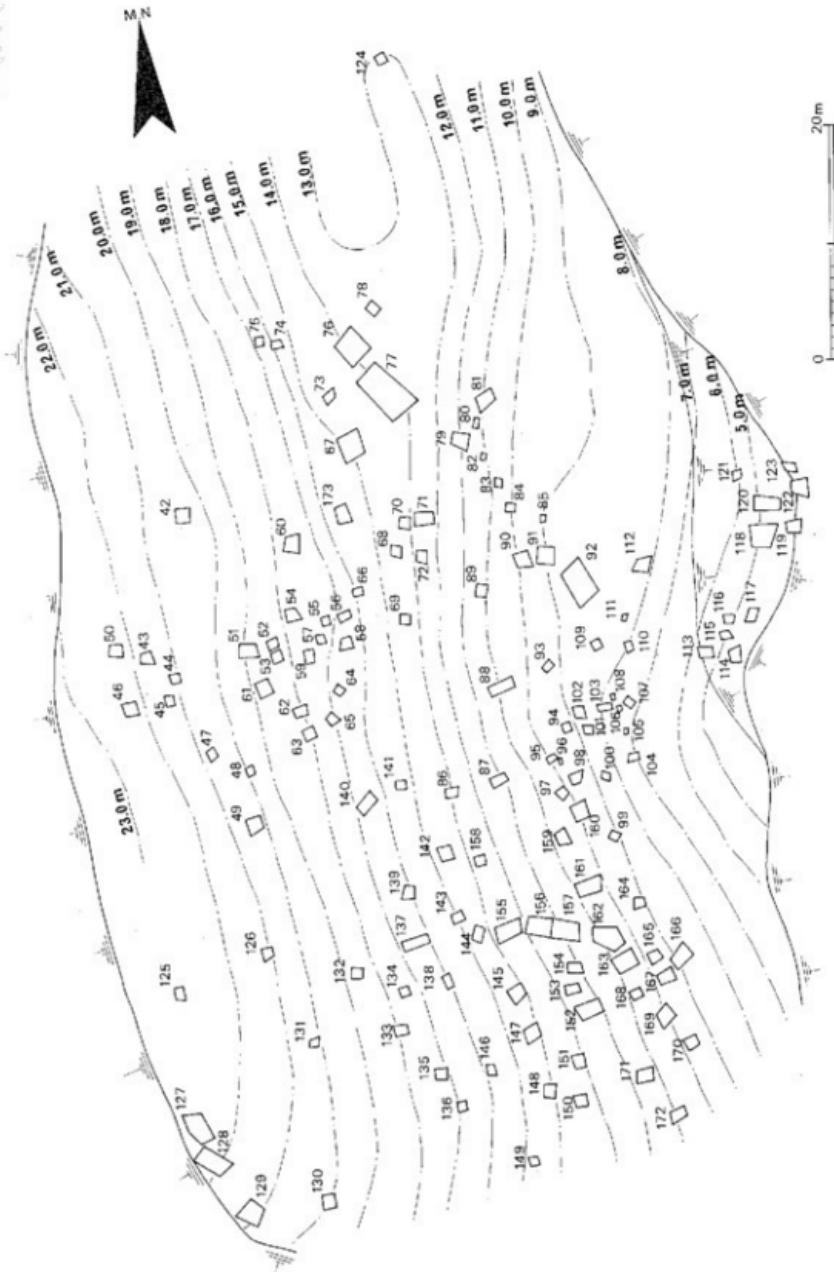
平成4年6月1日～6月12日の調査は、南半部の第2号遺構と第31号遺構、第41号遺構、第36号遺構の発掘調査と北半部の基数確認を主として実施することにした。

北半部では、確認済みの25基の他に109基の積石塚を確認した。確認遺構は、砂岩の板状石を利用したもの数基を除き、拳大から頭大位の礫石を利用したものが大部分である。また形成時期等については、詳細は不明であるが、古墳時代～中世、近世に至るものと考えられる。

南半部の調査で、第2号遺構は4世紀後半頃の積石塚、第31号遺構・第41号遺構は6世紀中～末頃、第36号遺構は江戸時代の配石石蓋上塚墓で18世紀後半の墳墓であることが明らかになった。その他の墳墓群については、数基の遺構の発掘調査を実施して時期等を明らかにする事が必要と考えられる。



第4図 箕島遺跡 南側造構配置図 ($S = 1/500$)



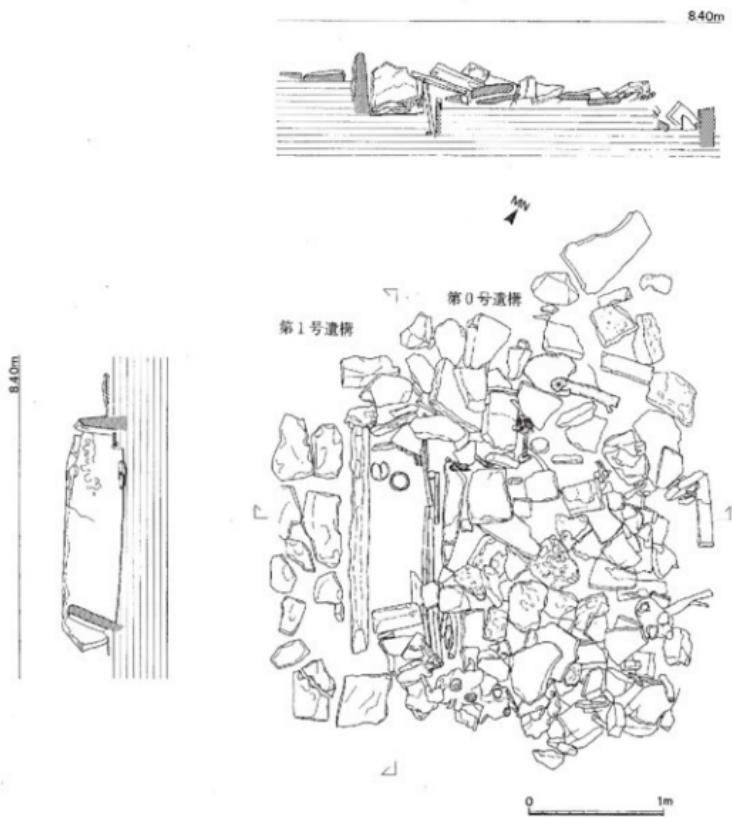
第5図 宮島遺跡 北側遺構配置図 (S = 1 / 500)

2 遺構

(1) 第0号・第1号遺構

1) 遺構 (第6・7図)

箕島遺跡の南側部で、最高所は8.5m程の標高であるが、その最高所のすぐそばに第2号遺



第6図 第0号(右)、第1号遺構(左)実測図 ($S = 1/40$)

構があり、第0号・第1号遺構は、その第2号遺構より若干低い位置に所在する。第1号遺構の石棺の東側の積石を除去して第0号遺構を発見したことからまとめて説明したい。

まず、第1号遺構の石棺からみしていくことにしたい。この石棺の上蓋はすでに取り除かれており、中には石棺の上端から30cm程まで土が充填していた。この土を掘り下げて、須恵器の坏身と坏蓋（第8図1・5）を検出した。2個体は並べて床面に置かれた状態で出土した。石棺の長軸は磁北から30°西へふれる。構造としては、西側の側壁材に長さ170cm程の厚さが均質な1枚岩を使用し、東側の側壁材は、小さめの棺材を9枚程二重に並べて築造している。小口材は中に入れている。石棺の大きさは、内法で長さが最長で130cm、最短で125cmで幅は40cmである。

第1号遺構は、西寄りに位置する石棺を含めて南北8m、東西7mの広い範囲に板石の積石が集められていた訳であるが、この積石を除去する過程で、石棺の東側・北側・南側で須恵器片を検出した。最初は石棺の棺外副葬かとも思われたが、これらの積石を除去した後、平石で囲った第0号遺構を確認したことから、この第0号遺構の副葬品の可能性も考えられる。

第0号遺構は第1号遺構に長軸をそろえて並ぶ形で構築されていた。平石を略長方形に並べてあったが、平石積みに何段も積み上げてある状況ではなかった。長さは最長で155cm、最短で145cm、幅は50cm程を測る。

第0号と第1号の先後関係については、切り合い関係等が確認できなかつたのではっきりしない訳であるが、両遺構の床面のレベルが、第0号遺構の方が10cm程低く、平積みされた第0号遺構の略長方形に囲った平積石の上面レベルと、第1号遺構の床面とがほぼ同じ高さになるところから、第0号遺構の上端を壊して第1号遺構が構築されたことも考えられる。第1号遺構が中央に構築されていて中央より西寄りに構築されていることも、ほぼ中央部にある第0号遺構より第1号遺構の構築が遅かったことの理由として挙げられるかもしれない。



第7図 第0号遺構実測図 (S = 1/30)

2) 出土遺物（第8図）

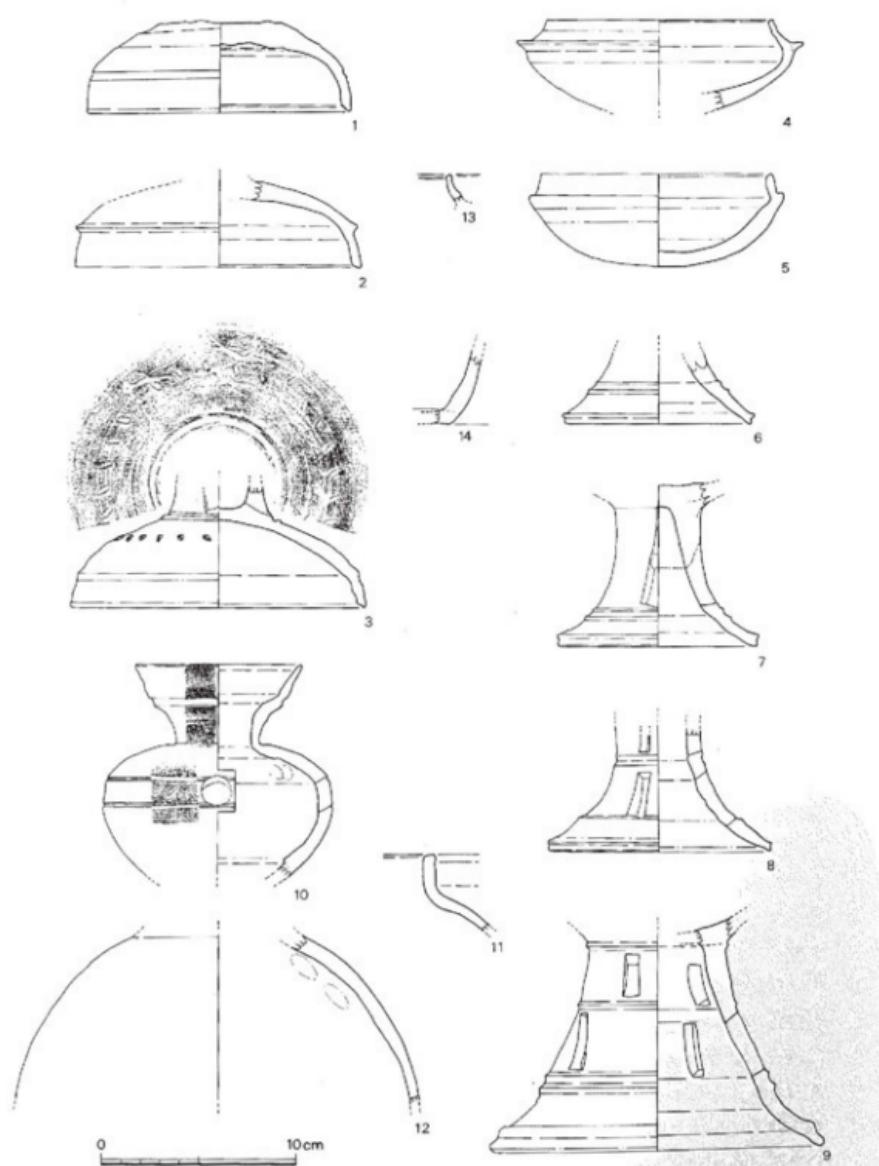
1～12が第1号遺構出土遺物で、13・14が第0号遺構出土遺物である。出土遺物は全て須恵器もしくは陶質土器である。

坏 蓋（1～3）

1は須恵器坏蓋の完形品である。第1号遺構の石棺内副葬品で、北側の床面直上出土。口径13.4cm、器高4.6cmを測る。天井部は円く、天井部と口縁部の境は鈍い沈線を巡らす。天井部外面の1/2～2/3程は回転ヘラ削りが施されるが、天井部中央の1/3は十分に粘土が削られず平坦になっており粗雑な感がある。ロクロ回転は左回りである。口縁端部は内面に内傾する段を有する。胎土には2～3mm大の砂粒が顯著に見られる。焼成は良好で、色調は淡灰褐色を呈する。2は陶質土器であろう。器種はつまみのつく坏蓋か。全体の1/2弱を欠く。復元口径14.6cm。つまみの接合部分は鈍い凹線で天井部と隔され、つまみ本体には透かしが施されていたことがわかる。天井部は丸く、口縁部との境は短く鋭い稜がつく。口縁部は端部にかけて一旦外湾したのち内湾気味にすばまる。口縁端部内面は内傾する面となる。天井部は1/2程までカキ目風の痕跡が見られ、他はナデかと思われる。内外面ともに緑茶褐色～黒灰色の自然釉がかかる。胎土は精良で、焼成は堅緻である。3も陶質土器で、2と同様につまみのつく坏蓋か。全体の1/3を欠く。復元口径15.0cm。つまみは天井部が整形された後につけられたもので、接合部分の周辺には太い沈線を巡らす。つまみには3方向から透かしが施される。天井部は丸味をもち、口縁部との境は鈍く退化した稜がつく。天井部の中位には櫛歯状の施文を全周に巡らす。口縁部は内湾気味にのび、端部内面には内傾する段が明瞭につく。調整はほとんどナデで、天井部内面は不整方向にナデを施す。器壁は天井部中位が最も厚く、天井部中央と口縁部ではこれより薄くなる。黒灰色の自然釉が外面と口縁部内面に付着する。胎土は砂粒の少ない精良なものであざき色を呈し、焼成は堅緻である。2に比べるとつくりはやや粗雑である。

坏 身（4・5）

4は坏身であるが、脚部がついて高坏になるかもしれない。全体の1/3を欠く。復元口径11.5cm。立ち上がりは内傾してのび、端部は内傾してゆるい面をなす。受部はほぼ水平にのび、端部は幾分銳さが残る。底部は丸味をおびるが扁平な感がある。外面底部の1/2～2/3程にはカキ目のような回転調整痕がみられるが、粗いハケかもしれない。他はほとんどナデ調整である。胎土は精良で、焼成は良好。色調は暗灰褐色を呈する。5は内面全体に赤色塗布がみられる完形の坏身である。1とともに第1号遺構石棺内の副葬品で、北側の床面直上出土である。口径11.8cm、器高4.7cm。たちあがりは短く、やや内傾してのびる。端部は内傾してゆるい面をなすが、4ほどの銳さはなく厚ぼったい。受部は横に張りださず、底体部の延長が丸くおさまって受部を形成しているため非常に短い。受部と立ちあがりの境は沈線状になる。底部は丸味をおび、1/2程は摩滅が著しい。焼成が不十分なためか。全体はナデ調整である。器形に丸く



第8図 第0号、第1号造構出土遺物 ($S = 1/3$)

ボッテリとした感があり、つくりは銳さに欠ける。胎土は砂粒がみられるもののわりと良質で、色調は暗灰褐色を呈す。

高 坏 (6~9)

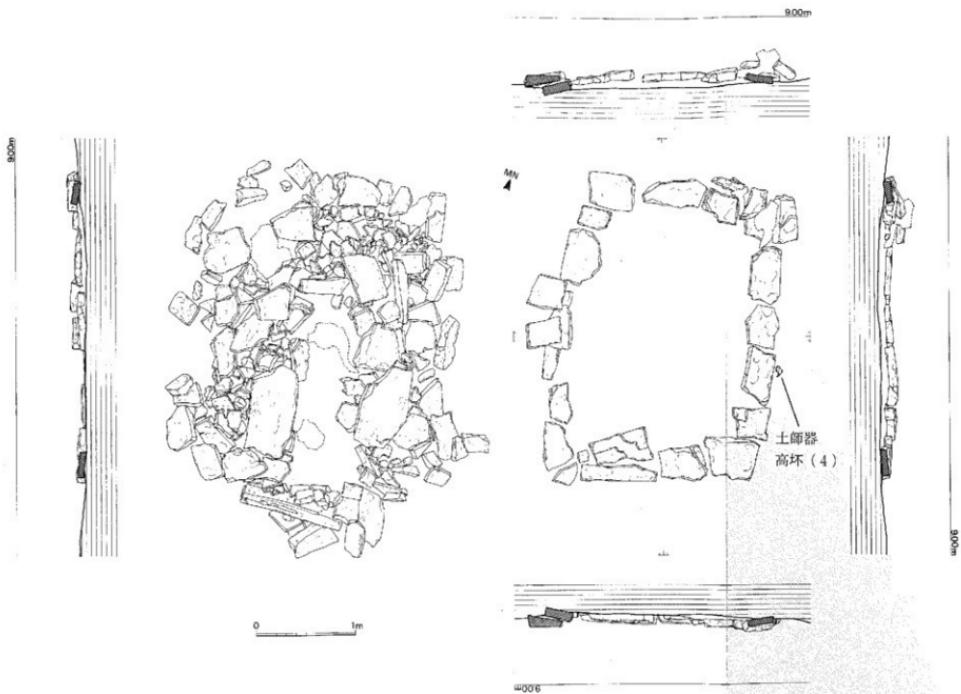
6~9は高坏の脚部である。6は復元脚端部径9.3cm。脚部は端部方向にかけてゆるやかに大きく広がり、脚体部には透かしが施される。透かしの下方には2条の鋭い突帯が巡る。脚端部は上端部がつまみ出され、端部内が凹むようになる。胎土・焼成とともに良好で、暗灰褐色を呈す。7は復元脚端部径10.0cm。脚体部に三角形の透かしが3方向から施される。透かしは三角形の頂部付近にそのまま粘土を残す粗雑なものもある。透かしの下方には2条の鈍い突帯が巡る。脚端部は上端部が外へつまみ出され、端部内がやや凹む。胎土は精良で焼成は良好、色調は暗灰褐色である。8は脚体部に方形の透かしを上下2段垂直に、3方向へ配したものである。復元脚端部径11.2cm。上下の透かしの間は沈線が、下段の透かしの下方には鈍い突帯がそれぞれ1条巡る。脚端部は上端・下端部分ともに鋭く仕上がり、端部内に凹みがつく。胎土は精良であざき色を呈し、焼成も良好で堅く焼き締まる。色調は暗灰褐色である。9は脚体部の透かしが上下2段交互に配されたものである。透かしはいずれも長方形で、下段の透かしは上段のものより細長い長方形になる。脚部の1/3を欠き、復元脚部径16.8cm。脚部は脚基部から大きくラッパ状に開き、脚裾部でさらにゆるく外反する。2段透かしの上下や間に突帯が巡り、下段の透かしの下方には他よりも鋭い2条の突帯が施される。この他、脚裾部にもわりと鋭い突帯が1条巡る。脚端部は丸く仕上げられ、端部内面はゆるい面をなして接地する。胎土は良質で、焼成は堅緻である。色調は淡黒灰色を呈する。

鰐 (10)

10は鰐である。復元口径8.4cm。口縁部は細い口頭基部から外反し、途中でさらに段をなして外方へ屈曲する。屈曲部分は鋭い稜がつき、その上方は沈線状に凹みが巡る。口縁端部は丸くおさまるが、鋭い仕上がりである。口縁部と口頭部の外面には波状文を施す。体部は扁平な楕円形でやや肩が張り、最大径は体部の1/2以上にある。体部の中~上位は2条の沈線が巡られ、その間に波状文を施した後に上外方から下内方へ円形の孔を穿つ。体底部は大半を失するが、ていねいなナデ調整を施す。口頭基部内面はていねいなヘラ削りを行い、体部との接合をなめらかにしている。胎土は精良なもので、焼成も良好である。色調は灰褐色を呈する。

壺 (11・12)

11は直口壺の口縁部である。口縁部は短く直立し、口縁端部はナデで端正な仕上がりになる。口縁端部の内側はわずかに内傾してゆるい面をなす。胴部はなで肩気味にのびるようだ。胎土は精良であざき色を呈し、焼成は堅緻である。陶質土器であろう。12は器種不明。壺の胴部であろうか。土器の傾きは任意に設定したが、胴部片の上端には明らかに口縁部ないしは口頭部が接続したであろう痕跡がうかがえる。胴部の肩に張りはなく、なだらかに丸味をおびた器形となる。胴部は外面中位までの平行タタキ目がていねいにナデ消される。内面はほとんどナデ



第9図 第2号造構実測図 ($S = 1/40$)

調整である。胎土は砂粒の目立たない良質なもので、ややあざき色を呈すか。焼成は堅緻。色調は外面がうすく釉のかかった黒灰色、内面は暗灰褐色である。

第0号遺構は確実に伴う出土遺物が少なく、図示できたのは2点にとどまる。13は坏身の立ち上がりである。立ち上がりの端部は内傾したゆるい面となり、端正なつくりである。14は器種不明。坏身の体底部片か。体部と底部の境は明瞭で、体部は内湾気味にのびる。底部の器壁はそれほど厚くない。胎土は精良で、色調は淡褐灰色。焼成は瓦質風である。

(2) 第2号遺構

1) 遺構(第9図)

第2号遺構は箕島の南半部の丘陵最頂部、標高8m付近に位置する。島の遺構のほとんどが傾斜の急な斜面に構築されているのに対し、第2号遺構の周囲は尾根の頂上で島唯一の平坦な場所があり、遺構の立地には好条件を備えている。また西側は切り立った崖で船でも近寄れず、南東側に密集した遺構群ともかけ離れた奥まった場所にある。第0号・第1号遺構と近接するもののこれよりやや高い位置にあり、立地からみて遺跡南側の中でも盟主的な位置を占める遺構であると考えられる。

調査前は遺構の中央と北側にそれぞれ2本ずつ低木が生い茂り、積石の間から幹をのばしている状態であった。封土はほとんど見られず、大小の割石が南北3.8m、東西2.5mの範囲に40~50cmの厚さでこんもりと積まれていた。ただ積石の中央付近は南北約1.5m、東西約0.6mにわたって積石が欠落し、土の露出している部分がみられた。1m程の長大な石材もこの部分の東西両側に横倒しのまま積まれてあったため、主体部の石材の抜取りや移動があったと判断した。とりあえず土の露出する部分に内部主体を想定し、調査を開始することにした。

遺構の主軸はほぼ北ないしは北北西で、等高線にはほぼ平行して作られている。想定した主体部内は積石が欠落しているせいか樹根がはびこり、その圧迫によって周囲の積石はほとんどが浮き上がった状態にあった。原位置を保つものはないか慎重に積石を取り除いていったが、石の積み上げ方は粗雑で面をそろえた形跡はみられなかった。下部構造にいたるまで主体部構築の痕跡をみつけることはできなかった。全ての積石を除去し終えた後、下部構造に南北3m弱、東西2m弱の不整長方形をなす石の配列がみられた。配石の南側では、割石の小口部分を外側へ向けて並べるなど少なくとも2段は平積みしていたことがうかがえた。配石の東側中央外縁では、土師器高杯が口縁部を石の側面に接するよう横向きにして副葬されていた。以上のことから、この下部構造は明らかに外面を意識してそろえたものであったと考えられる。不整長方形の配石の内側は敷石状になるかと思われたが、大小の割石が凹凸著しく散乱し、平坦な面を

なすにはいたらなかつたため明らかではない。構築当初から敷石がなかつたのか破壊が敷石面まで及んだのか判断は難しい。遺構の周囲や内部に地山整形や掘り込みの痕跡は全くみられなかつた。

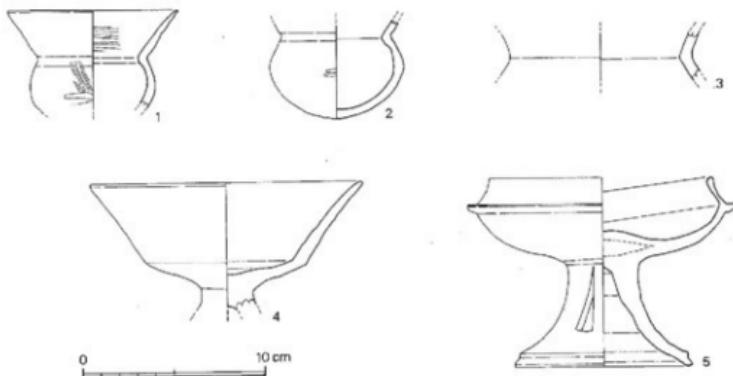
遺物は前述の土師器高坏の他、東側積石除去作業時に積石内より土師器の小形丸底壺2点と陶質土器の高坏1点が破片で出土した。また北側積石除去作業時には土師器の壺頸部片1点とガラス小玉3点が出土した。石の積み方や遺物の出土状態から、内部主体はすでにかなりの破壊をうけていたと思われる。また、遺構の東側・北側部分は祭祀の場所であったと考えられる。

2) 出土遺物(第10・11図)

1～4は土師器、5は須恵器である。

小型丸底壺(1・2)

1・2はともに積石内出土の小型丸底壺である。1は球形の体部に直線的に上方へのびる口縁部がつくものである。復元口径9.3cm。口縁部内面と体部の境は稜が明瞭につく。口縁の基部はすぼまる。口縁部は外表面がナデで、内面はハケ目が残る。体部は内面がナデ、外表面は上半が細いハケ目で下半はヘラ削りか。ていねいなつくりで器壁は薄く仕上がる。胎土は精良で、焼成も良好である。2は口縁部を欠失する。体部は最大径が1よりわずかに大きい程度である。内外面ともに摩滅が著しく調整不明だが、体部外表面はヘラ磨きかと思われる。器壁は薄く、胎土は精良である。



第10図 第2号遺構出土遺物①(S=1/3)

壺(3)

3は1・2よりやや大きめの中型壺で、口頭部分であろう。第2号遺構北側積石除去作業時に出土した。口縁部内面と体部の境は明瞭であるが底は鈍い。全体に摩滅が著しく調整不明だがナデか。胎土には1~2mmの大砂粒が目立ち、精製されていない。

高坏(4・5)

4は高坏の坏部である。第2号遺構の積石を除去した後の下部構造の東側石に、坏部を横に沿わせるように出土した。坏下半部と坏上半部との境に明瞭に稜をもち、上半部は直線ないしは外反気味に開く。坏内面底部はていねいなナデ調整で、平坦ちかくに仕上げる。坏体部内外面は摩滅が著しく調整不明。脚部は欠失しているが、坏部のつけねから大きく広がるような傾向を示す。胎土は1mm大の砂粒が多数含まれ、精製されているとはいえない。5は第2号遺構の東側積石内出土の高坏である。坏部は立ち上がりが内傾しながら上方へ長くのび、端部は内傾する端正な面をなす。受部はほぼ水平につく。脚部は大きくラッパ状に開くもので、脚体部に三角形の透かしが3方向に配される。脚裾部には鈍い突帯が巡り、端部は丸くおさまる。坏底部に焼成時の焼きぶくれが生じ、器形には大きな歪みが見られる。胎土は精良で、焼成は堅緻。つくりがていねいなことから陶質土器かと思われる。

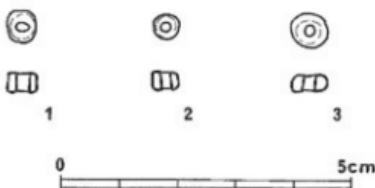
ガラス小玉(1~3)

この他に第2号遺構積石内よりガラス小玉が3個出土している。ガラス小玉はいずれもライトブルーを呈す。1は径5.1mm、厚さ3.5mm、孔径2.0mm。2は径4.5mm、厚さ3.2mm、孔径1.5mm。3は径6.2mm、厚さ3.0mm、孔径1.7mm。粒は不揃いで、孔の大きさもまちまちである。

(3) 第31号・第41号遺構

1) 遺構(第12図)

第31号・第41号遺構は島の南東部、標高4.5m前後の東斜面にある。周間は30基余りの遺構が群集し、第0号・第1号・第2号遺構とは離れた海岸部を望む斜面上に立地する。当遺構は箕島遺跡の大多数を形成する小集団の墳墓の一つと考えられる。斜面の山側の方を第41号遺構、谷側の方を第31号遺構とした。



第11図 第2号 遺構出土遺物②(S=1/1)

第31号遺構は主軸をほぼ南北にとる箱式石棺である。蓋石は存在せず、南北の両小口部分と東側石を欠くため全長・全幅を知り得ない。西側石が海側に大きく傾斜していることから、土圧等によって崩落したのであろうか。斜面下の大部分を欠いたために床面も流失し、残存する割石も原位置を保つ敷石か判然としない。深さは50cm前後と考える。西側石は1枚の長大な石材で全長1m弱。西側石を共有する第41号遺構は南下半を欠失すると考えられるため、第31号遺構の石棺も全長はもう少し長くなるようだ。

遺物は石棺内側の埋土から多数出土したが、前述したように崩壊が著しいため流れ込みの可能性もあり、確実に伴う遺物を判別できなかった。

第41号遺構も第31号遺構同様、主軸を等高線と平行のほぼ南北にとる箱式石棺である。蓋石を欠き、北側の小口部分と西側石の一部が残存する。また東側石は第31号の石棺の西側石を一部共用することから、第31号よりも後で作られたものと思われる。石材に不足するような島ではないため特異な構築方法といえる。側石は土圧のためか海側へ傾斜している。床面は地山を平坦に整形していたことがうかがえた。北側小口幅約45cm、現存長約65cm、深さ約40cmを測る。全長が極端に短いが、南下半部分を崩落等で欠失したことも考えられ正確な数値は不明である。

遺物は石棺内の埋土から須恵器片3点が出土したが、実測できたのは坏身・坏蓋の2点にとどまる。第31号の出土遺物としたものの中には第41号から流れ込んだものが含まれている可能性がある。

第41号遺構の北側部分に割石の散乱がみられる。別の遺構かとも思われたが、石材の抜き取りあと等は確認できず、敷石にしても粗雑な感じで性格不明である。遺物の出土は無かった。

2) 出土遺物（第13・14図）

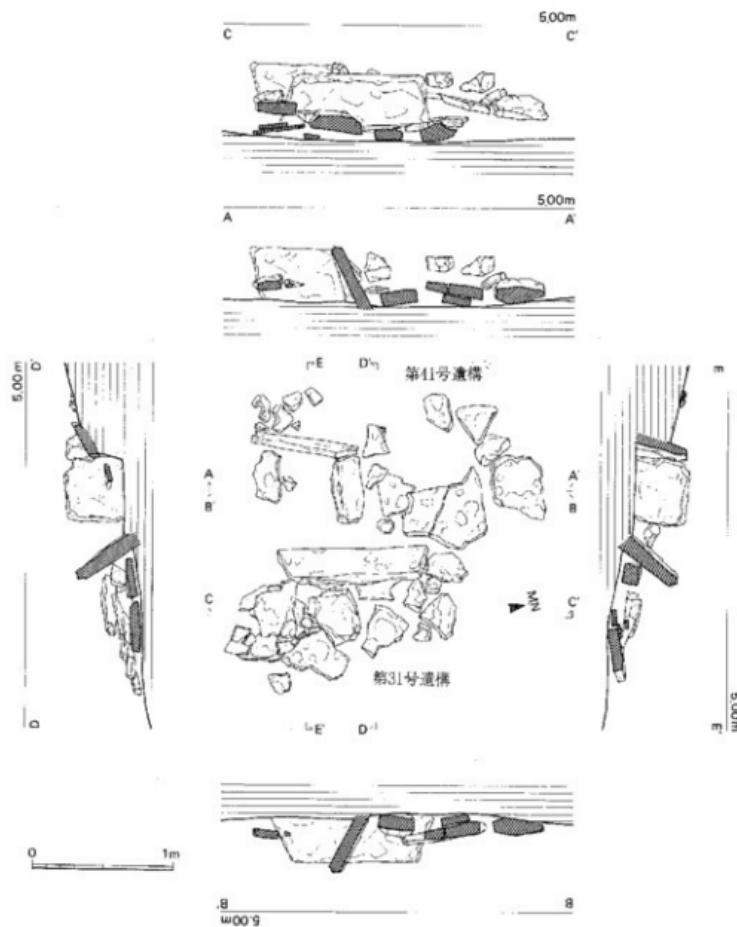
1～15は第31号遺構の出土遺物である。1・2・4・5・7・9・10は石棺内出土で、その他は第31号遺構に伴うものである。16・17は第41号遺構の出土遺物である。

坏 身（1・2）

1は坏身の立ち上がり部から受部にかけての破片である。立ち上がりはゆるく屈曲しながら直立気味に短くのび、受部はやや上外方につく。受部と体部の境はV字状の鋭い沈線で隔される。2は坏身だが高坏の可能性もある。立ち上がり部は内傾しながら上方に長くのび、端部は面をなさずに丸くおさまる。受部は坏体部よりわずかに水平につまみ出されるだけで、立ち上がり部分とは浅い沈線で隔される。坏底部は平坦にちかく、底部の2/3以上に回転ヘラ削りを行った後に中央付近はナデを施すようだ。胎土・焼成とともに良好で、坏体部外面は黒灰色を呈する。

高 坏 (3~9)

3～9は高坏である。3は立ち上がり部を欠失するが、内傾してのびるものようだ。受部は坏体部と一体化しており、貼り付けやつまみ出すことなく体部をそのまま水平に仕上げたものである。脚部は坏部に接合された後、広い長方形の透かしが4方向に配される。透かしの下方には2条の鋭い突帯がつけられる。脚部はあまり大きく広がらず、脚端部では内溝気味にす



第12図 第31号(下)、第41号(上)遺構実測図($S = 1/40$)

はまる。端部は平坦な面をなして接地する。受部と坏部内面には緑褐色の自然釉が厚く付着している。胎土は精良で、焼成は堅緻。陶質土器であろう。4は坏部の立ち上がりは直線的で、若干内傾した後に直立気味にのびる。端部は丸く仕上がる。受部は短く水平につまみ出され、坏体部との境は浅く凹む。坏部はほぼ直線的にすばまる。坏部内面にはカキ目条の痕跡がみられる。胎土は精良であずき色を呈し、焼成は堅緻。陶質土器である。5は坏蓋のような形態だが、中央部に透かしを施した形跡が見られ、つまみか脚部か判断に迷ったものの高坏とした。復元口徑13.6cm。内湾気味にのびた坏体部は口縁端部を短く外方へ屈曲させ、口縁端部内面は内傾するゆるい面をなす。坏体部の中位には鋭い沈線を1条巡らす。調整は内外面ともナデを施す。器壁は厚ぼったく、つくりに鋭さは感じられない。胎土・焼成ともに良好である。6は脚基部で、坏底部との接合状態がわかる資料である。7は脚体部に上下2段垂直に3方向から長方形の透かしが配されたものである。上下の透かしの間には鈍い突帯が巡り、下段の透かしの下方にも鈍い沈線が施される。器表面には釉の付着もみられる。胎土は精製されたあずき色のもので、焼成は焼きぶくれはあるものの堅緻。陶質土器か。8も7と同様に脚体部に上下2段垂直の長方形透かしが3方向に配されるものである。上下の透かしの間は沈線が巡り、下段の透かしの下方と脚裾部には鋭い突帯が施される。脚端部は丸くおさまるが、全体につくりはシャープである。釉は内外面ともに付着がみられる。胎土・焼成ともに良好。陶質土器であろう。9は脚裾の部分である。透かしの下方と考えられる部分に沈線が巡る。脚端部は上下方向にそれぞれつまみ出されたようになり、端正な面を形成する。釉の付着は内面に見られる。胎土は精製されたあずき色で、焼成は堅緻。これも陶質土器であろう。

鶴 (10~12)

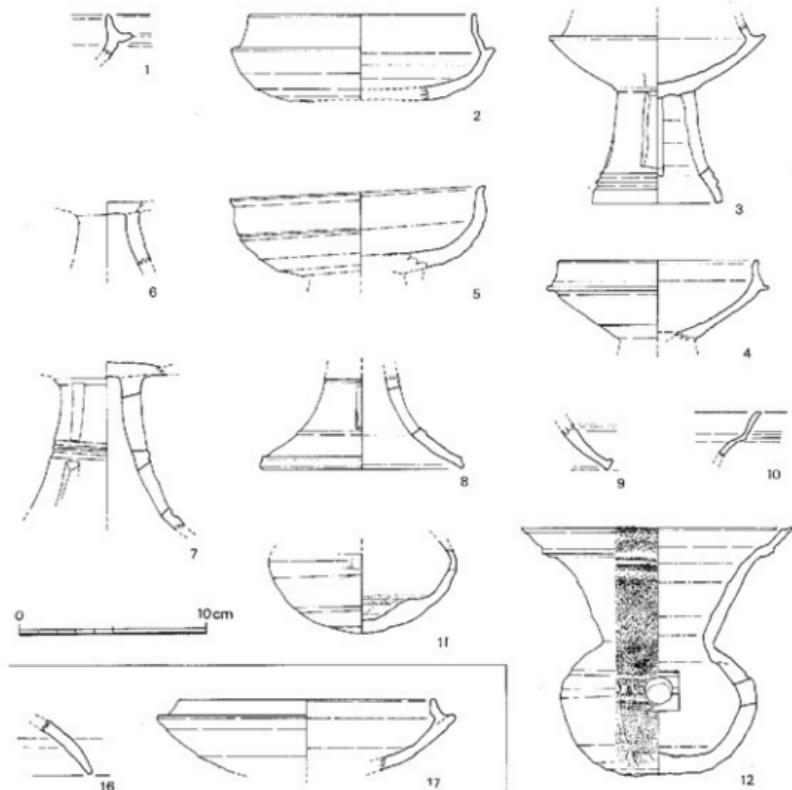
10~12は鶴である。10は口頸部が途中で段をなして外方へ屈曲し、口縁部を形成する。外面の屈曲部分は鋭い稜となり、口縁端部内面はゆるく内傾する面をなす。胎土は精良で灰褐色を呈す。焼成は堅緻で、器壁は薄くつくられる。つくりがていねいなところから陶質土器と思われる。11は鶴の底体部で、中位から下位にかけて体部をすばらせた後、底部中央に外側から粘土を補充して丸底になす。底部内面はていねいに指で粘土をならし、外面がナデで平滑に仕上げる。体部中位にはほぼ水平に円形の孔が穿たれる。胎土は精良で灰褐色を呈し、焼成は堅緻。12は復元口徑14.4cm、器高13.1cm。口縁部と口頸部の一部を欠くがほぼ完形である。頸基部は太く、口頸部は長くラッパ状に大きく開く。口頸部は途中段をなして屈曲するが、屈曲部分は明瞭に稜がつく。口縁端部は鋭く仕上がり、内面は内傾する段をなす。体部は球形にちかく、体部最大径は中位よりやや上にある。体部の中～上位には2条の浅い沈線が巡り、円形の孔はその沈線間に上外方から下内方にかけて穿たれる。体底部には回転ヘラ削りを施す。口縁部と頸部に波状文、体部中位の沈線の間に歯状の施文を巡らす。胎土は石英粒が見られるもののわりと良質で、焼成も良好である。

壺 (13)

13は壺の口縁部か。直立からやや外傾した口縁部は、端部がさらに強く外方に屈曲し端正な面をなす。釉は全面に付着するが、口縁端部は口禿状になる。胎土はザックリとした感じで、焼成は良好である。

壺 (14・15)

14は壺であろう。頸部がしまり、胴部はあまり肩が張らずにのびる。胴部中位まで内外面ともタタキ目がみられるが、外面はタタキ目をハケで、内面は指ナデで消しているのがわかる。胴部上位は横方向に施されたハケ目がカキ日風の文様をなしている。口縁部には連続波状文を施す。胎土は精良で褐色を呈し、焼成は軟質の瓦質風である。陶質土器であろう。15も壺で、頸部がしまり口縁部が大きく外反するものである。口縁端部は強くナデられたため直下に鋭い



第13図 第31号、第41号遺構 出土遺物 ① (S = 1 / 3)

稜がつくものの、端部は丸く仕上がる。胴部は傾きを任意に設定したが、焼成時の歪みが著しい。胴部は細い平行タタキが施され、タタキの上からは等間隔に3条の浅い沈線を巡らす。胴部のタタキ目は口頸部付近ではいねいにナデ消される。胎土は精製されたあざき色で、焼成は堅敏である。つくりからみて陶質土器であろう。

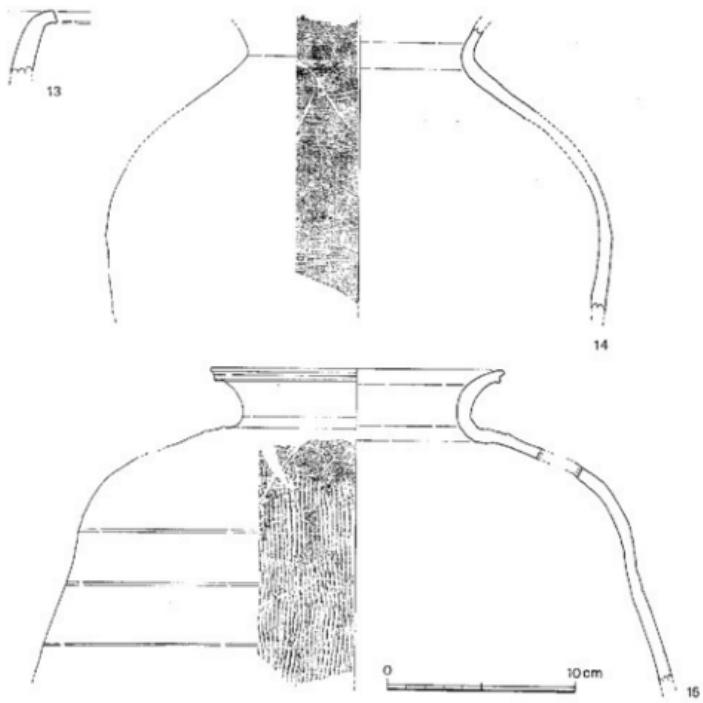
16・17は第41号遺構の石棺内出土である。

坏 蓋 (16)

16は須恵器の坏蓋であろうか。器高がそれほど高くならずに口縁部にいたる。天井部と口縁部の区別はつきにくい。

坏 身 (17)

17は坏身で復元口径13.4cm。器高はあまり高くならない。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くおさまる。受部は坏体部がそのままのびて水平に仕上がったものである。坏底部は1/2程度までヘラ削りが行われる。胎土・焼成ともに良好。



第14図 第31号遺構 出土遺物 ② (S = 1 / 3)

(4) 第36号遺構

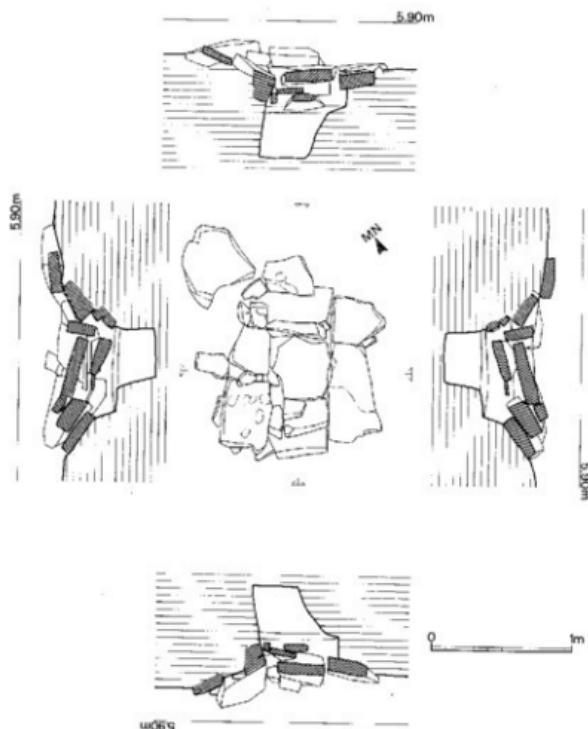
1) 遺構 (第15図)

箕島の最南端部分の崖上に構築された近世の配石石蓋土壙墓である。形状は、北東から南西方向に若干細長く、長方形を呈す。

土壙は、上段に長径0.65m×短径0.55m×深さ0.15m程と下段に径0.45m×深さ0.3m程の上下2段の掘り込みをもつていて、

土壙上端には、比較的幅広な砂岩の板状石を土壙の周囲に敷き詰めて配石し、その上に同様な砂岩を利用して石蓋を乗せている。

土壙内から副葬品として、寛永通宝7枚とオオヘビガイ、オトメガサ等の貝類および棺材に



第15図 第36号遺構実測図 ($S = 1/40$)

使用したものと考えられている鉄製の釘が出土した。

また、当遺構の周囲に砂岩の石塔が、1基横転した状況で発見された。この石塔に銘文が記されていたが、直接的な関連については不明である。

[銘文] 慶翁 居上 没年七十三歳 享保三 戊戌年正月三日

2) 出土遺物 (第16・17図)

出土したのは鉄釘7点・銭貨7枚の他、炭化物・貝類である。貝類に関しては山本愛三先生(日本貝類学会会員)に鑑定を依頼し、結果については別稿に記載したので参照されたい。

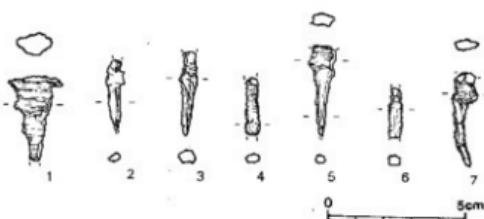
鉄釘 (第16図)

鉄釘は完形が5・7の2点で、一端を欠失するものが1～3の3点、両端を欠失するものは4・6の2点である。頭部の形状は1・5のようにT字状のものと7のように逆L字状のもの、2種類あるようだ。完形品はともに全長が3.2cmで、他の釘も本来はこ

れらとほぼ同じ大きさであったろう。木目を観察してみると、2・3・5・7には上半部が縱方向で下半部は横方向の木目が見られ、組み合せた2枚の板に打ち込まれていたことがわかる。5・7より板の厚さは少なくとも8～9mm程はあったと想像される。

銭貨 (第17図)

銭貨は7枚が銹着した状態で出土した。そのうち剥ぎとりができなかつた2枚を除き、残り5枚はいずれも寛永通宝である。5が古寛永で3は新寛永であるが、この他に1・2・4のような「マ頭通」(註)と呼ばれているものも見られる。7枚が副葬されているが、いわゆる六道銭と呼ばれるものであろう。



第16図 第36号遺構 出土遺物① (S=1/2)



第17図 第36号造構 出土遺物 ② (S = 2 / 3)

註 「マ頭通」とは櫻木晋一氏の論文「九州地域における中・近世の銭貨流通—出土備蓄銭・六道銭からの考察—」〔九州文化史研究所紀要〕第36号（1991）より引用すると、「これは、通の字の旁上部がコではなく、マになっているものである。鳥羽銭・伏見銭（1736年初鋤）といわれているものがマ頭通であることから、関西で鋤造されたと考えられる。」

IV 小 結

対馬の中央・浅茅湾の東岸に位置する大山岳は、標高187mながら付近の山々より一際大きいことからこの名称がついたとされている。また山中には祀があり山岳信仰の対象になっていることから、大山を「おおやま」といわず「おやま」(=御山?)と尊称するようになったともいう。かつては浅茅山ともいわれ、「方葉集」卷15の天平8年(736年)に遣新羅使が「対馬の浅茅の浦に船泊てし時、順風を得ず停りて五日を経き、ここに各惱心を凍て詠める歌三首」の中の一首にその名は見える。

百船の泊つる対馬の浅茅山 時雨の雨に黄変ひにけり

朝鮮半島や中国大陆と日本の間を行き交う人々が、外海の荒海を避け、波穏やかな浅茅湾に停泊地を求めてこの山を目印に多くの船が出入りしたことであろう。一方で大山岳は現在は不明ながら対馬八烽の一つに数えられる烽火台があったとされ、戦国時代は永正年間(1504~21)に大山城が築かれ、明治時代には旧日本陸軍によって砲台も置かれていたという。時には遣使らの心をなごませ歌にも詠まれたこの山が、またある時にはその地理的条件ゆえに緊迫した戦況を見下ろす前線基地としての役割をも負ってきた。

この大山岳の麓一帯が大山地区である。大山浦の奥まった沿岸部分に形成された集落はそれほど大規模なものではなく耕地も少ないが、海に生きたのであろう。1471年の『海東諸國紀』では「吾也麻浦(=大山浦)三百余戸」の記述が見え、南の和田浦を含めここには大きな勢力の一つがあったことがうかがえる。大山には小田氏が居住し、江戸時代以降洲藻の氏族と共に浅茅湾を支配したという。また、濃部浅茅湾一帯の小島がほとんど大山領であったことは、伝統的に浅茅湾を支配した勢力であったことのあらわれであると考えられている(註1)。

今回調査された箕島も大山の勢力下であったであろうことは想像に難しくない。島山の周辺から和田浦、濃部などの浦々には古い遺跡があり、箕島以外にも草島、丸島、中ノ島、沖ノ島など無人の小島には石棺の遺構が残っているという(註2)。大山では和田浦と沖の箕島に中世の墳墓群があるとされていた。以下、調査で得られた箕島遺跡の概要をまとめてみたい。

調査で確認された箕島遺跡の遺構総数は173を数える。しかし、基數を確認する一方で足元にはおびただしい数の積石らしい遺構が次々に現われ、それぞれの遺構の境界を明確にできないもののが多かった。石材の一部が露出しているものや、まだ地中に残存しているものまで想定すると遺構総数は現在知られている数をはるかに上回ることは必至であろう。この中で実際に内部主体まで調査できたのは6基にすぎない。江戸時代の築造である第36号遺構を除いて、他の5基はいずれも古墳時代のものであった。従来言っていた中世墳墓は確認できなかったが、これは比較的調査が容易な島の南半部の遺構に限って実施したからかもしれない。島が継続的

に集団墓地として利用されてきたなら、中世の遺構もあってしかるべきであろう。結論は北半部の調査後まで持ち越すことになるが、今のところ墳墓の形成時期は古墳時代～中世、近世に至るものと考える。

次にそれぞれの遺構について見ていくことにする。まず第0号・第1号遺構であるが、第0号遺構は積石で全体を覆われた石室系の内部主体をもち、第1号遺構は積石のない大形の箱式石棺である。構造の異なる2基は隣接して築造され、一方の側壁を他が利用しているところに特徴がある。第1号遺構の場合、石棺は西側壁に長大な一枚石を使用しているのに対し、0号遺構と接する東側壁は複数の薄い板石を並べて構築しており、構造上にも特徴がみとめられる。両遺構の先後関係は判断に苦しむところであるが、積石の状態等から考えて第0号遺構に付随する格好の第1号遺構が後で築造されたと考えるほうが妥当であろう。遺物では第1号遺構出土とした中に第0号遺構から流れ込んだものが含まれている可能性もあるものの、第1号遺構の石棺床面から須恵器の坏身と坏蓋が副葬品として出土しており、これらの遺物からみて築造時期は6世紀中～後半に比定できよう。第0号遺構の場合は確実な伴出遺物に乏しく時期を定かにできないが、第1号遺構の棺外出土遺物の中には5世紀～6世紀にかけてのものもあり、先後関係からみてこのあたりの時期が考えられるかもしれない。第0号・第1号のような遺構のあり方は、この他には対馬上対馬町のコフノ深遺跡（註3）があげられる。ここでは2基とともに近接した時期の築造と考えられ、5世紀末～6世紀初頭に位置づけられている。

第2号遺構は島南半部の最頂部にあり、積石の規模も大きく、盟主的な立場にあった人物の墳墓であろう。現地表面直上を床面とし、外面をそろえ、平面が長方形になるように石を積み上げていたと思われる。積石の内部には石室や土壙のような施設の跡は見られず、内部主体は不明であった。確実な伴出遺物は床面東側で出土した土師器の高杯があり、これによると4世紀後半代が考えられる。積石内から出土した土師器の小型丸底壺からみても、この頃のものとして大過ないのではなかろうか。第2号遺構に類似した積石構造をもつものとしては同町の塚塔崎遺跡（註4）等があるが、こちらは中世墳墓とされているため直接の関係は考えにくい。今後の発掘事例を待ちたい。

第31号・第41号遺構は第0号・第1号遺構と同じく、隣接して築造され、一方の側壁を他が利用しているところに特徴がある。先後関係では第41号遺構が第31号遺構の西側壁を利用していていることから、第31号が第41号に先行するものと判断されるが、出土遺物のうえからはさほど時期差は考えられない。互いに近接する遺構であるため、ある程度の遺物の混入は免れないものの、第31号出土としたものは坏身や壺等から6世紀中～末の年代が想定され、第41号でも6世紀末ぐらいに比定できるものがある。石棺の構造からみても割合近接した時期を思わせる。

第36号遺構は今回調査した中の最も新しい遺構で、配石石蓋土壙墓である。周囲には享保3年（1718）の銘が記された墓石が横転していたが、第36号に伴うものかは判別し難い。土壙内にはいわゆる六道錢とよばれる寛永通宝が7枚銹着した状態で副葬されていたが、これを見る

と判読できた5枚は古寛永1枚、新寛永1枚、マ頭銭3枚という内訳になっている。これらの錢貨の組合せから時期を推定すると、元文元年（1736年）初鋤のマ頭銭が3枚と多く、元文4年（1739年）初鋤の寛永銭が1枚も含まれていないことから、1738年以前の墓ではないかと思われる。ただし享保銘のある墓石はマ頭銭鋤造以前にあたるため、第36号遺構とのつながりは考えにくい。ちなみに六道銭の枚数は6枚一組が通例であるが、7枚のものもあり、九州南部では7枚組が一般的であるという（註5）。この他、特色としてオニアサリほか数種類の貝類の副葬があげられる。前述の塚塔崎遺跡（註4）でも墳墓内にオニアサリの副葬が見られるが、こちらは1つの墳墓に左右両殻そろったオニアサリが必ず1個体のみ副葬されているという。中世と近世の時期差はあるが、オニアサリほか貝類の副葬はこの周辺地域の葬送儀礼の一つと考えられるだろう。

以上、それぞれの遺構について築造時期や特徴など簡略にまとめてみたが、陶質土器と思われる遺物については筆者が力量不足であるため縦半的位置付けや系統等明らかにすることはできなかった。県文化課の藤田和裕氏をはじめ多くの方々にも多大なる御指導を賜ったが、期待にそえるほど論をつくすことができず責任を痛感する次第である。記述に誤りや説明不十分なところがあれば是非とも御教示願いたい。最後に、足場の悪い場所にもかかわらず発掘に参加して下さった方々、調査に際し便宜をはかっていただいた美津島町教育委員会の関係者の皆様方に深く感謝申し上げたい。

註1 美津島町誌編集委員会『美津島町誌』 1978

註2 註1文献と同じ

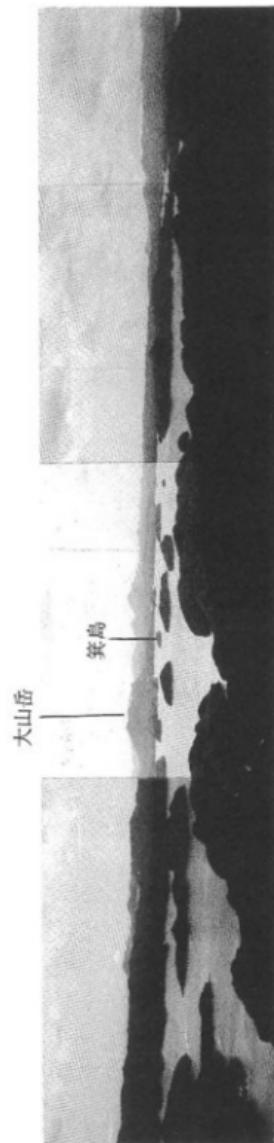
註3 藤田和裕編『コフノ隊遺跡』上対馬町文化財調査報告書第1集 長崎県上対馬町教育委員会 1984

註4 塚塔崎遺跡発掘調査団編『塚塔崎遺跡』 長崎県下県郡美津島町教育委員会 1977

註5 横木晋一「九州地域における中・近世の銀貨流通—出土備蓄銭・六道銭からの考察—」『九州文化史研究所紀要』第36号 1991

図 版





笠島遺跡 遠景（烏帽子岳より）



第0号（右）・第1号（左）遺構 梱出状況（南から）



第0号（手前）・第1号（奥）遺構 積石除去後の状況（東から）

第1号造構
遺物出土状況
(南から)



第1号造構 遺物出土状況 (西から)



第2号遺構 検出状況（東から）



第2号遺構 検出状況（南から）



第2号遺構 積石除去後の状況（東から）



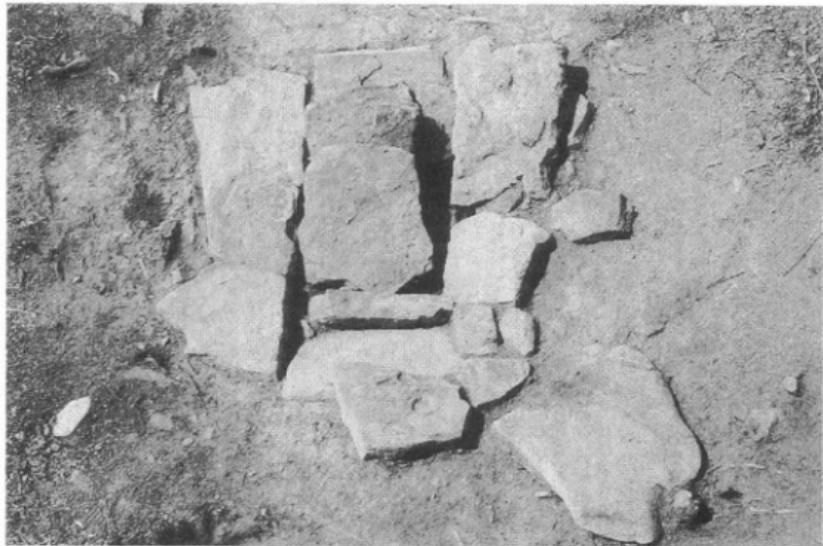
第2号遺構 遺物出土状況（東から）



第31号（手前）・第41号（奥）遺構（東から）



第31号（手前）・第41号（奥）遺構、調査後の状況（東から）



第36号遺構 検出状況（北から）



第36号遺構 調査後の状況（北から）



第9号遺構



第11号遺構



第9号・第10号遺構



第10号遺構



第13号遺構



第17号遺構



第22号遺構



第24号遺構



第25号遺構



第26号・第29号遺構



第28号遺構



第38号遺構



その他の集石造構

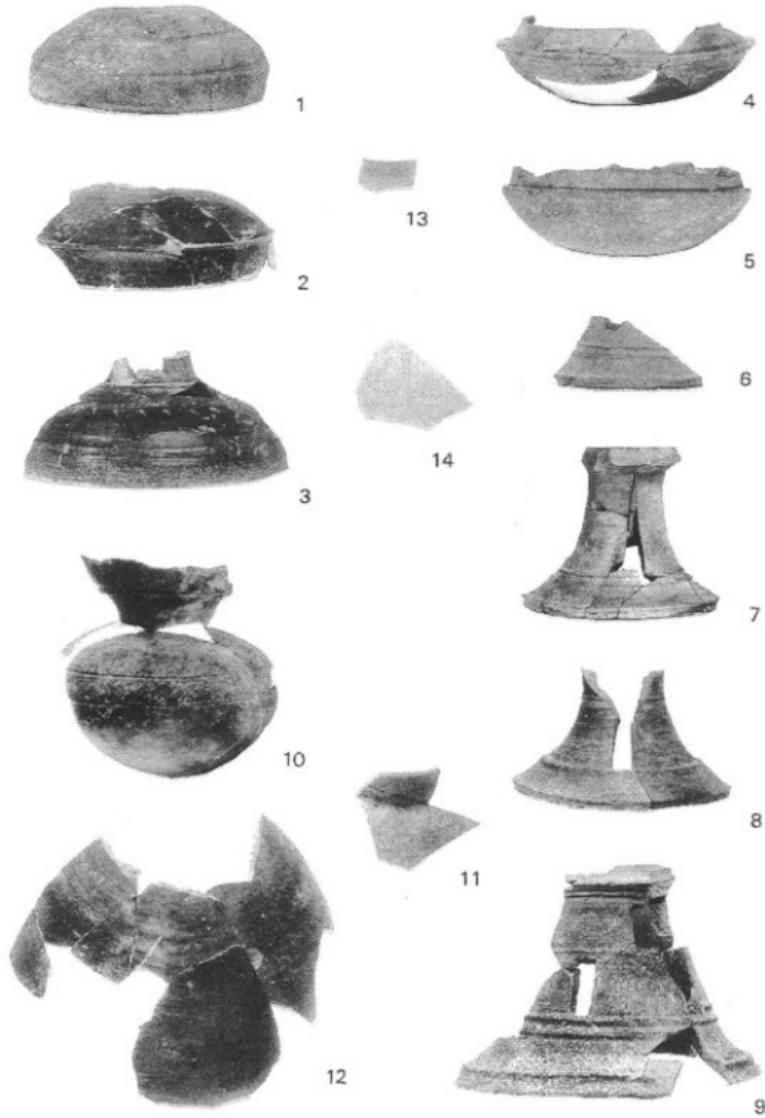


調査風景 ①

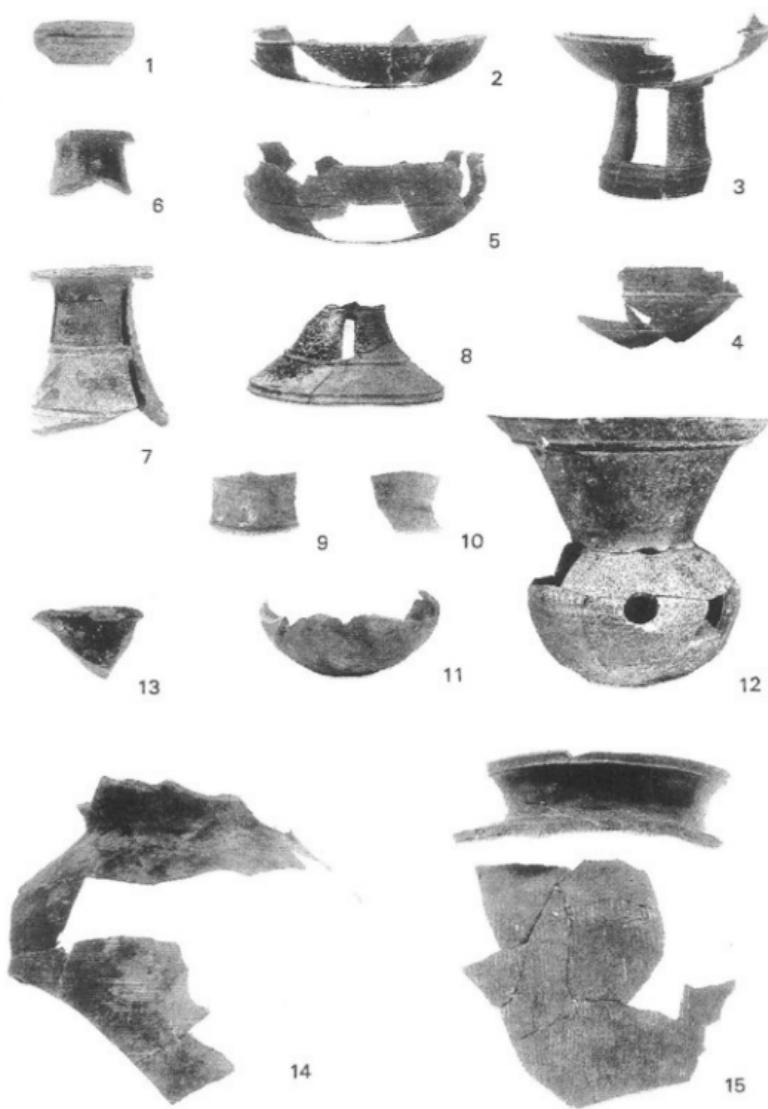


調査風景 ②

圖版 12

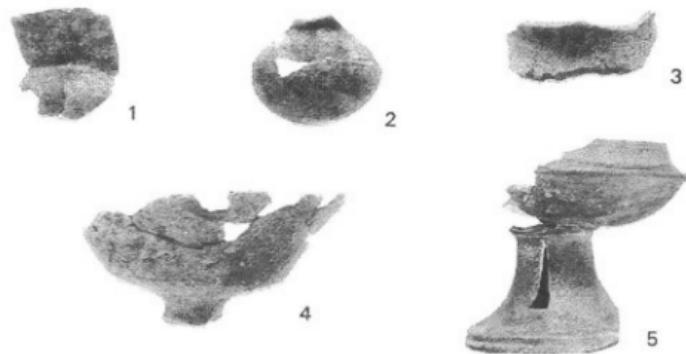


第0号、第1号遺構 出土遺物 (S=1/3)



第31号遺構 出土遺物 (S = 1 / 3)

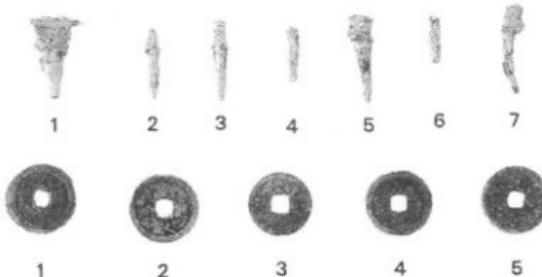
図版 14



第2号遺構 出土遺物 玉類 (S = 1／1) その他 (S = 1／3)



第41号遺構 出土遺物 (S = 1／3)



第36号遺構 出土遺物 (S = 1／2)

V 長崎県対馬糸島 36号墳墓内より出土した貝類

山 本 愛 三

長崎県対馬箕島36号墳墓内より出土した貝類

山本 愛三（日本貝類学会員）

I. 序

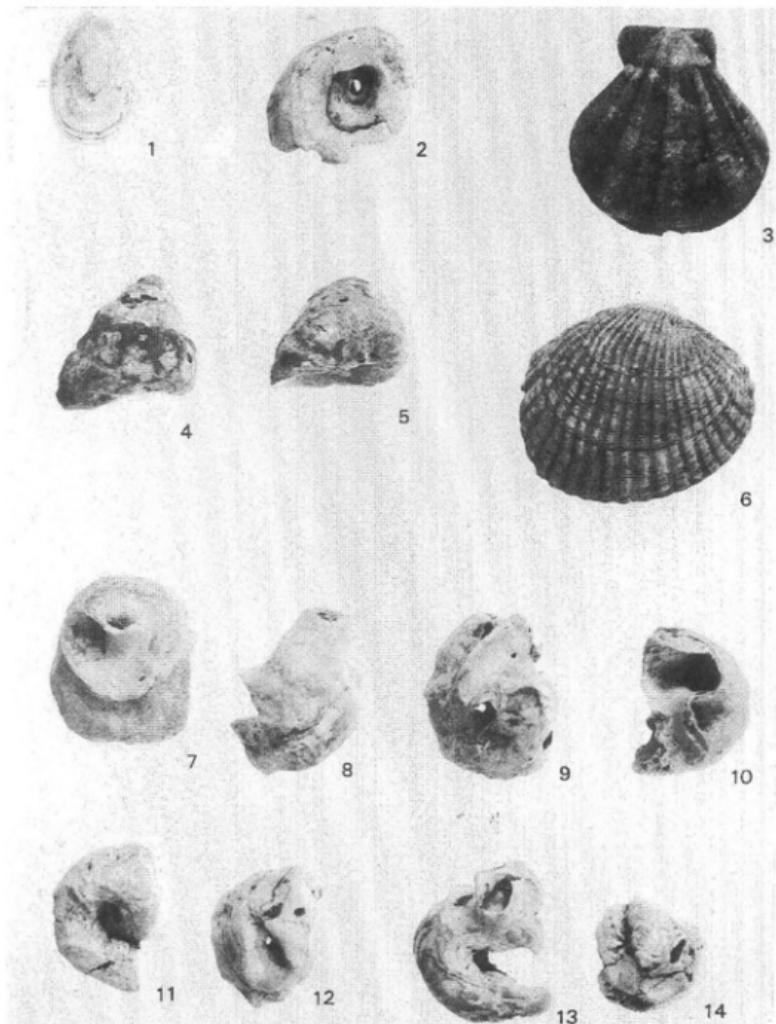
本遺跡は長崎県下県郡美津島町にある。濃部浅茅湾に点在する、島々及びその周辺地区にある江戸期の墳墓群である。36号墳は箕島の北端にある。

今回、長崎県文化課主任文化財保護主事、副島和明氏より出土貝類の分析依頼をうけた。この機会を与えて下さった同氏及び関係諸氏に深甚の謝意を表するものである。

II. 出土貝類の種類とその考察

1. *Scutus(Aviscutum)sinensis*(Blainville,1825)オトメガサ
潮間帯、岩礁性、出土1個体
2. *Omphalius rusticus*(Gmelin,1791)コシダカガンガラガイ
潮間帯、岩礁性、出土2個体
3. *Serpulorbis(Cladopoda)imbiricatus*(Dunker,1860)オオヘビガイ
潮間帯、岩礁性、出土37個体
4. *Decatopecten striatus*(Schmacher,1817)キンチャクガイ
潮間帯～50m、砂礫底性、出土1個体
5. *Prototthaca(Prototthaca)jedoensis*(Lischke,1874)オニアサリガイ
潮間帯～20m、砂礫・泥底性、出土1個体

以上、4種、42個体が出土した。オオヘビガイは岩礁に着生しており、鉄べらで剥ぎとらないと採れない。オトメガサは肉体部が黒色でいずれも食用には不適である。このようなものを何故墓にいれたか理由はさだかでない。江戸時代の墳墓に貝を入れる例を見るのは筆者として初めての経験である。



1. オトメガサ

2. オオヘビガイ

3. キンチャクガイ

4. 5. コシダカガングラ

6. オニアサリ

7~14. オオヘビガイ

箕島遺跡

美津島町文化財調査報告書 第6集

1993年3月31日

発行 長崎県下県郡美津島町教育委員会
長崎県下県郡美津島町大字糸知

印刷業エスケイ印刷